平成 16 年 7 月の解説（週間天気予報）

【7 月の天候状況】

7 月は太平洋高気圧の勢力が例年に比べて強く、梅雨前線は日本海まで北上することが多い状況でした。高気圧に覆われて晴れの日が多かったため、東日本と西日本を中心に気温が高くなり、月平均気温はほぼ全国的に平年値を上回りました。横浜など 6 地点で 7 月の月平均気温の最高値を更新しています。また、岡山などで月降水量の最小値を、延岡（宮崎）などで月間日照時間の最大値を、それぞれ更新していますが、一方で、梅雨末期の豪雨や台風による大きな災害がありました。

上旬は、日本の南東海上から張り出す高気圧の西端に位置する西日本を中心に大気の状態が不安定な日が多く、局地的に短時間の強い雨の降る日がありました。4 日から 5 日にかけては、日本海を北東進する低気圧に向かって吹く南風の影響で、西日本を中心に広い範囲で最高気温が 35℃を上回りました。

中旬は、朝鮮半島から延びる梅雨前線が北陸地方や東北南部で停滞し、前線の活動が活発化したため、新潟・福井・福島の 3 県を中心に豪雨が発生しました。その一方で、東日本の太平洋側から西日本にかけては高気圧に広く覆われ、雨が少なく、気温の高い傾向が続きました。特に、20 日から 21 日にかけては関東甲信地方を中心に猛暑となり、東京と甲府では最高気温の年間の極値を更新し、さらに東京では最低気温の高い気温もこれまでの記録を更新しました。

下旬は、台風第 10 号の影響で天気の崩れた地方が多くなりました。この台風は、28 日に強い勢力のまま八丈島の南東海上に達した後、本州の南海上をゆっくり西進して、31 日には高知県に上陸しました。このため、西日本を中心に大荒れの天気となりました。

【7 月の検証結果】

7 月の「降水の有無」の適中率（3 日～7 日目の平均）は、全国平均で例年（注）（1992 年～2003 年の平均）より 6 ポイント高い 70%でした。地域的には、東北地方と北陸地方はほぼ例年並ですが、その他の地方は例年より 5 ポイント以上高くなっています。

最高気温の予報誤差（RMSE）は、全国平均（2 日～7 日目の平均）で例年（1995 年～2003 年の平均）より 0.1℃小さい 2.5℃で、北陸・九州北部・沖縄の各地方は例年より 0.3℃小さくなっています。

一方、最低気温の予報誤差は、全国平均で例年並の 1.8℃でした。地域的には、東海地方では 2 日～7 日目の全予報期間で例年より 0.2℃以上小さくなっています。その他の地域では、2 日目と 3 日目は例年より小さい地方が多いのですが、5 日目と 6 日目は約半数の地方が例年より大きく、特に東北地方と関東甲信地方では 0.3℃以上大きくなっています。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

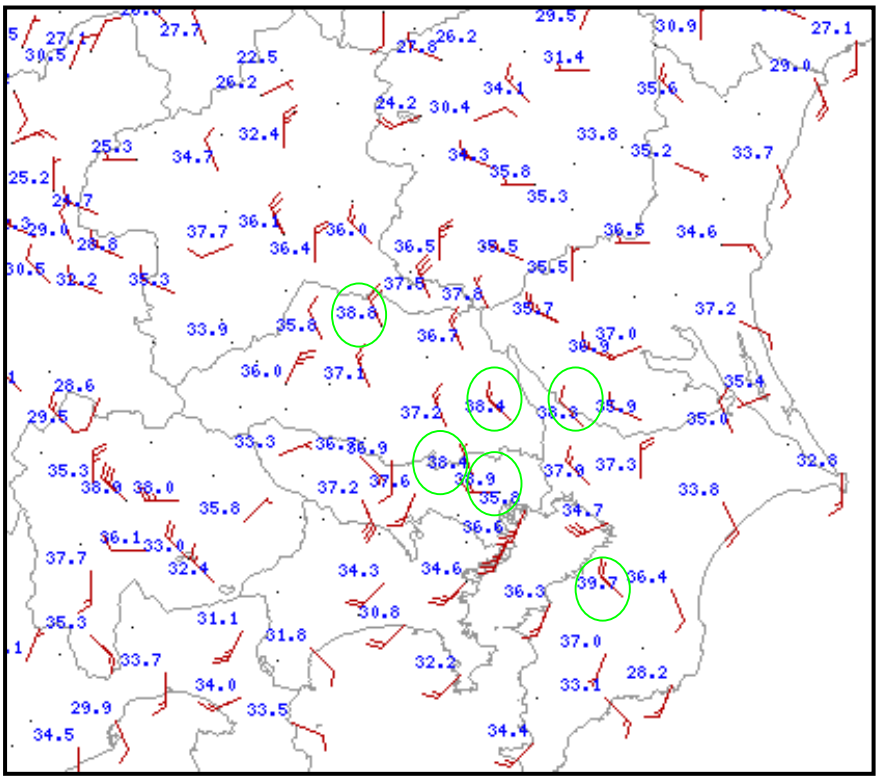
【7 月の週間天気予報から】―― 東京での最高気温の更新 ――

20 日に、東京（大手町）で最高気温が 39.5℃に達し、1923 年の観測開始以来第 1 位を記録しましたが、週間天気予報では 31℃から 34℃の範囲の真夏日として予報していました。

20 日は、高気圧が西日本に張り出しました。この高気圧の北東端付近で強化された北西の風が関東北部の山岳を越えて関東平野に吹き降りて、フェーン現象が発生しました。同時に、この北西風が東京地方への海風の進入を妨げたことも、東京での最高気温の記録が更新された主な要因になっています。

3 日前の予報資料には関東地方で北西風が吹く可能性も予想されていましたが、はたして帯状に吹き抜ける北西風が東京を通るかどうか、その北西風が海風の進入を防ぐかどうか、については局地的な条件が大きく左右するため、週間天気予報での記録的な高温の予測には難しい

ものがあります。



アメダスの風と気温（20 日 13 時）

日本海から関東北部の山岳を越えた北西風が関東平野を吹き抜けており、北西風の通り道である埼玉県北部から東京湾周辺部にかけて、38℃を超す地点（緑色の円）が散在する。

【9月の天候の特徴と週間天気予報の利用に際して】

立秋（今年は 8 月 7 日）以降の暑さを「残暑」と呼びます。都市化の進んだ地域では、9 月になっても、まだ残暑が厳しいと感じる日が多いようです。

気象庁は 10 年毎に過去 30 年間の各種気象資料から「平年値」を計算しています（現在の平年値は 1971 年～2000 年の平均）。9 月の東京での気温の月平年値の変遷をみると、日最高気温はほぼ一定ですが、日最低気温は単調に上昇しており、1921 年～1950 年と比べると、現在の平年値は 1.5℃も高くなっています。ヒートアイランド現象が原因で、都市部では夜間の気温低下が小さく、9 月の寝苦しい夜は増える傾向にあります。

週間天気予報では日々の最高気温と最低気温を予報しています。日中の最高気温だけでなく、朝の最低気温も含めた 1 週間単位の変化傾向を知れば、9 月の残暑にも上手に対処できます。

なお、9 月における週間天気予報の気温についての平均誤差（2 日目～7 日目平均の RMSE）は、全国平均（1995 年～2003 年）で、最高気温が 2.4℃、最低気温が 2.1℃です。

	日最高気温	日平均気温	日最低気温
1921-1950 年	26.8℃	22.6℃	19.2℃
1931-1960 年	26.9℃	22.8℃	19.5℃
1941-1970 年	27.0℃	23.0℃	19.7℃
1951-1980 年	26.7℃	22.9℃	19.9℃
1961-1990 年	26.7℃	23.2℃	20.2℃
1971-2000 年	26.8℃	23.5℃	20.7℃

気温平年値の変遷（東京：9 月）

各気温の月平年値が 1921 年～2000 年の間にどう変わったかを示している。海風の影響を受ける東京の日最高気温は頭打ちの状況だが、日最低気温の最近の上昇は顕著で、日平均気温もやや上昇傾向にある。